

【大会印象記】

澁谷美紀（東北農業試験場）

村研大会には2年ぶり、3回目の参加である。前回、前々回参加した際は分科会方式ではなく、懇親会後も世界農村社会学会のスライド上映会が行われるなど、懇親会や宿泊等を通じて和気藹々とした雰囲気が印象的であった。今回は、二分科会に分かれて的一般報告、会場である東洋大学のモダンな建物の印象と相まって、開会前は当初予期していた以上に緊張感が漂っていたように思う。しかし、開会後は例年通り活発な議論がなされ、分析視角や手法について得るところが大きかった。

とりわけ、「日本農村の20世紀システム：現代社会経済理論による農村研究の再発見」というテーマで行われたシンポジウムは、自分の調査フィールドや調査対象が抱える問題とその背景を整理し、理解する手助けになった。シンポジウムは、「生産力主義」を特徴とする「20世紀システム」が日本農業・農村を貫徹していく過程やその意味を究明し、21世紀へのペースpekティブを開こうとするものであったが、現在調査している、日本短角種（和牛地方特定品種の一つ）の牧野組合の再編問題を考える上で、多くの示唆を得た。

現在、北東北山間地域では、農家組織である牧野組合によって、入会林野を利用した日本短角種の林間放牧や造成草地への放牧が行われている。近年、牛肉輸入自由化を機に、

牛肉価格が下落し飼養頭数が激減してきたため、各地で、牧野組合の効率的運営と中核的農家の育成に向け牧野再編が図られてきた。しかし、入会放牧地への愛着が強い高齢農家を中心に再編への抵抗が強まる一方、それら高齢農家中心のしがらみが強い組合運営を嫌い、畜種転換や離農を進める農家の増加で、再編は暗礁に乗り上げている。

シンポジウムの中で秋津元輝氏は、1910年前後に林野を利用した多様な生業が展開したことを見たが、北東北地方において、製炭や鉱山開発と共に日本短角種の飼養が広まったのも、まさにこの頃と考えられる。やがて経済的合理性と技術的合理性を追求する「20世紀システム」が山村農業を貫徹する中、産業としての肉牛生産が盛んになり日本短角種の飼養頭数も増加した。しかし、今日では生産効率性が追求されているだけではない。環境保全を可能とする生産や牧野の観光的利用価値が再評価されるなど、「資本主義的生産以外のための社会的利用」への動きがみられることは、秋津氏の指摘の通りである。

しかし、地域の連帯性が著しく低下する中で、青壯年世代は牧野利用を厭い、一方で舍飼を中心の黒毛和種への転換を図り、他方で兼業へ傾斜していく。再編された牧野の「社会的利用」を図るのは一体誰なのか、どのように利用していくのかなど、地域資源の管理主体に関する課題は大きい。これは村研の研究蓄積が豊富なテーマの一つであるし、私自身、こうした成果に学びつつ、今後の研究を深めていきたいと思っている。

また、シンポジウム以外でも、栗本修滋氏の「人里植物と地域コミュニティ」という報告では、自然環境技術をめぐる多様な客体についての実証研究から教えられることが少くなかった。その他、須田文明氏の「部門的／国土的レギュレーション様式と品質のコンヴァンション」や高橋基泰氏の「上塩尻村における親族構造と社会・経済組織：導入」などからも、分析視角やデータの分析方法の点で多くを学ばせていただいた。さらに、大会中、現在自分が取り組んでいる他の調査についても、諸先生方から貴重なアドバイスをいただいた。今後の研究に活かしていきたいと考えている。